P・T・フォーサイスにおける神の聖性

— R・W・デールの影響をめぐって

森 島 尊

God's Holiness in P.T. Forsyth: through influence of R.W.Dale

Yutaka Morishima

P.T. Forsyth's theology centers on the cross of Christ and is inseparable with the concept of atonement. What gives it power and depth, however, is his concept of the Holiness of God in His judgment upon sin. This is one of the basic elements in his theology and also one of the most difficult to understand. It is interesting to note that in spite of extensive efforts by many researchers to identify the source of this concept, it remains unclear to this day. Some have suggested Puritan theologians such as Owen and Goodwin. In the final analysis, they may be correct. However, there is no conclusive evidence. Rather we think that the congregational minister and Puritan theologian, R. W. Dale is a likely source. He is also well known for his book, *Atonement*, and had very close relationship with Forsyth during his formative years. But, it is not easy to corroborate evidence. Indeed, no one has succeeded yet. However, we found clues in Dale's idea of Atonement in his later work. So, this thesis focuses on the influence of Dale's later work on Forsyth's concept of Holiness. First we will examine Forsyth's own testimony of the relationship between his own ideas and the later writings of Dale. Then we will examine what influence those writings may have had on his concept of the holiness of God.

はじめに

P・T・フォーサイスの神学は、十字架を中心としており、贖いの教理である Atonement と切り離すことができない。けれども、何と言つてもその神学に力と深みを与えているのは、審判を伴う神の聖概念である。フォーサイスにとって神の聖性とは、神を神とする神の本質であり、義を意志される神の行為そのものであった。それは、罪を裁き、人間を救う、「贖罪的審判」⁽²⁾を行う神であつた。キリストの十字架とは、その神の聖が啓示された出来事である。罪の審判と赦しを同時に満たすこの聖概念は、当時他に類がない彼独特の深みのある概念であると共に、彼の神学の中で最も理解に窮する言葉の一つであつた。我々は、彼が如何にしてその概念を捉えるに至つたかを考察したい。

フォーサイスに影響を与えた人物は数知れないが、Atonement の教理において、特に二人の人物を挙げる事ができる。それは F・D・モリスと R・W・デールである。⁽³⁾フォーサイスは、若い時モリス神学の影響を受けていた。しかし、後にデールの路線を継承するようになったと述懐している。⁽⁴⁾つまり、フォーサイス神学の思想形成において、決定的な影響を与えたのは、デールである可能性が高いのである。フォーサイスがデールと出会つた頃、彼の神学はまだ完全に成熟していなかつた。⁽⁵⁾つまり、彼の Atonement 理解に欠かすことのできない「神の審判における神の聖性の概念」⁽⁶⁾が欠けていたのである。研究者の間では、この概念がオーウェンやグッドウィンなどのピューリタン神学者から来していると推測されている。なるほど突き詰めればそうなるかもしれない。けれどもその確証は無い。むしろ我々は、フォーサイス神学が成熟に到る過程の中で、ピューリタニズムの歴史的考察をなしたデー

ルの影響が決定的であつた可能性が高いと考えるのである。

けれども、この理解は一枚岩のようにいかなない。実際に今まで誰も成功していない。というのも、フォーサイスは大変複雑な過程を経て神の恩寵を捉える言葉を獲得したからである。我々はその複雑な筋道を解きたい。そのためには、まずフォーサイスとデールの関係の結びつきが明らかにされなければならない。しかもそれは単なる人間の友好関係ではなく、神学的内容が伴つたものでなければならぬ。我々はその糸口がデールの後期 Atonement 理解にあると考えるのである。したがって、この問題の焦点は、後期デールの著作によるフォーサイスの聖概念への影響に定まっていく。我々は、まず後期デールの著作とフォーサイスの結びつきを彼の証言に従つて考察し、その次に神の聖概念との関係を考察する。

先行研究における問題——前提の裏付

フォーサイスにおけるデールの影響を考察するにあたって、まず解決しておかなければならない問題がある。それは、Atonement に関してフォーサイスは本当にデールから影響を受けていたのかという根本的な事である。実はこの問題は、後に触れるが先行研究において曖昧なのである。我々は、自明なことでとされていながら、未だにきちんと取り組まれていないこの問題に注目したい。なぜならば、それがフォーサイス神学の深みを捉えるのに欠かせない事柄だと考えるからである。ここでは、デールの Atonement の影響を考察する足掛かりとして、まず先行研究における先の未解決の問題の原因を指摘し、その解決の糸口を示すことにする。

サクラメントや社会倫理に比べて、デールの Atonement の教理に関する知名度の高さは卓越している。今でこそ

あまり知られなくなったが、彼の著書 *Atonement* は当時の必読書であり、英国国教会の主教 (Bishop) 達に推薦されていただけでなく、彼らの神学校でも教科書として用いられていた。そして、かの有名なジョン・ヘンリー・ニューマンもその書物を絶賛した。⁽⁸⁾ その勢いは、海外にまで及び、フランス、ドイツを越えて、遙か彼方の日本にまで紹介された。⁽⁹⁾ そして、二〇〇三年に改訂版として新たに出版されたことは、⁽¹⁰⁾ デールの *Atonement* の教理が如何に影響力を持っていたか理解できるだろう。

フォーサイスにおけるデールの影響は、フォーサイス自身の言葉と娘の証言によって確実なものとなっている。⁽¹¹⁾ 客観的に見ると、フォーサイスもデールから *Atonement* の影響を受けていたと考えられるだろう。ところが、事柄はそれ程簡単に済まされない。というのも、フォーサイスや娘の証言に反して、デールとフォーサイスの *Atonement* は、表面的な共通点が少ないのである。例えば、言葉の使い方も微妙に違っている。デールは、罪を法に背くこととして考えるが、⁽¹²⁾ フォーサイスは、関係の断絶という意味で捉えている。⁽¹³⁾ また *Atonement* という言葉も、デールは罪を償う生贄に近い意味で用いているが、⁽¹⁴⁾ フォーサイスは関係の回復という意味を残している。⁽¹⁵⁾ もちろん突き詰めれば、両者は同じことを表現しているのだが、それにしてもデールからの影響を看取しにくいのである。むしろ表面的には、フォーサイスはモーリスと類似している。デールよりもモーリスの影響が強いという理解は、フォーサイス生前中の一九〇一年 (五三歳) に掲載された、第三者によるフォーサイスの紹介記事が更に助長させたと考えられる。⁽¹⁶⁾ そこでは、彼がモーリスに傾倒したことが紹介されており、デールの影響には触れられていないのである。したがって、後の研究では、デールよりもモーリスからの影響を取り上げるものが多い。

フォーサイスにおけるデールの影響の考察は、後の *Atonement* 研究の発展により、更に妨げられたと考えられる。例えば、フォーサイスが優れた書物として紹介したモバリー (R. C. Moberly) の大著 *Atonement and Personality* (一

九〇⁽¹⁷⁾は、デールの問題点を指摘し克服することが眼目にあつた。彼は次のような指摘をした。デールは、Atonementの事実を論理として体系的に構築することが不可能であると考えていた。例えば、犠牲や身代金や償いの生贄も、事実の例証 (illustration) であると考えていた。⁽¹⁸⁾したがって、彼が教理史的考察をしたことも、「教理史は、客観的 Atonement の概念が神学者によつて発明されたものでは無かつたという証拠である」⁽¹⁹⁾と言わんがためであつた。けれども他方で、彼自身の理解が罰 (punishment) を強調し、教理史を辿る中でもグロテュウスの刑罰説に引き寄せられていたことを批判されたのである。⁽²⁰⁾もちろんデール自身は、罪をキリストに転嫁することなど「法的創作」⁽²¹⁾だと述べてその理解を退けていた。少なくとも、デール自身はグロテュウス主義ではなかつたと考えられる。というのも彼は、最終章で自身の見解を明らかにし、キリストの行為を単なる同等の刑罰による法の履行ではなく、「神の義の啓示」或いは「義なる法に対する服従の行為」と考えていたからである。⁽²²⁾けれども、モバリーなどによつて、最終章とそれまでの長い議論が矛盾すると指摘され、先の批判を払拭するには至らなかつたのである。⁽²³⁾実際、デールの教理的立場は、次の引用に紛れも無い事実として表れていた。「宗教改革の理論の本当の特徴は、グロテュウスから受けたものを強調したり弱めたりした形に最も完全に表現されると言つてもよいかもしれない」⁽²⁴⁾。この言葉が先の批判を助長していた。さらに、当時グロテュウスの刑罰説を正統と考えていた非国教会にこの書物が受け入れられていることから、この書物にその傾向があつたことは否めないのである。

いずれにしてもデールに対するこの批判は、フォーサイスとの関係を考える上で困難な問題になる。なぜならば、フォーサイスは若い時、当時会衆派教会で正統と見なされていた先の理解に反対し、そのことでヨーク州連盟から除名されたからである。⁽²⁵⁾フォーサイスのこの立場は後期になつても一貫している。⁽²⁶⁾それにも拘わらず、フォーサイスは、デールの Atonement の教理を批判していないという厄介な問題があるのである。

このことは、フォーサイス研究の中で未解決の問題である。豊富な資料によってフォーサイスの思想形成を試みたブラッドリーは、「デールを通して、フォーサイスは、今まで感じなかった Atonement の関心を習得したという可能性は無いだろうか」と問うて、その可能性を示唆している。⁽²⁷⁾しかし、その可能性の根拠は、両者の友好関係に置かれていた。⁽²⁸⁾そして結局、神学的影響について確信に到らず、「恐らく、デールの最も重要な影響は、一つの模範に過ぎなかった」と結論してしまつた。⁽²⁹⁾つまりフォーサイスが、Atonement の教理において、デールからどのような影響を受けたのかということは、未だに明らかになっていないのである。

さて、我々はこの問題解決の糸口になり得る一点を指摘したい。というのも、デールの影響を考察する上で、従来のフォーサイス研究が見落としている点の一つあるのである。それは、デールには Atonement を主題にした文章が他にもあるということである。実は、Atonement 研究者もフォーサイス研究者も、デールが著書 *Atonement* で世界的に有名になったため、その著作に目を奪われ、他の文書存在を忘れていたのである。しかし、例えばヘプライ人への手紙を基にして一八六五年（三五歳）に出版された *The Jewish Temple and the Christian Church* ⁽³⁰⁾の中には Atonement と題した章が一つあり、また生前に出版された最後の書物である *Christian Doctrine*（一八九四年、六四歳）⁽³¹⁾の中には、Atonement と題した章が三つもあるのである。我々は後者の存在に注目したい。

この書物の中でデールは、キリスト教信仰を秩序立てて組織的に構築する試みを今までのことがなかったと言⁽³²⁾う。けれども、彼の説教は教理的説教であつた。このことに関して、彼は興味深い逸話を残している。彼はまだ大⁽³³⁾学を卒業して間もない頃、当時の説教者に影響力があつた熟年の説教者に次のように言われた。「私は、君がカルズ・レイン教会の会衆に、教理的説教をしていると聞いている。彼らはそれに耐えられないでしょう」。私（デール）は答えた。「彼らは、それに耐えなければならぬでしょう」⁽³⁴⁾。デールは、晩年になつてもその説教の姿勢を崩

さなかつた。そして彼の経験によれば、それは耐えられないどころか、「多くのキリスト者に大きな関心を与えるものであつた」⁽³⁴⁾。そこで彼は、教理を組織的に論ずることはしなかつたが、「説教において」⁽³⁵⁾「このことを試みたのである。この書物は、説教的組織神学の書物なのである。彼は、少なくとも残り六つの主題を扱った二巻目を計画していたが、健康が勝れず、それは果たされなかつた。しかし、幸いにもこの書物には、Atonement に関して三つの説教が収められていたのである。

さて、フォーサイスは、デールの Atonement を評価しているところで、次のように言つた。

「啓示の概念が神学的世界で中心的・支配的場を占めるようになっていた。それは、デール自身が感じていた傾向であつた。……それは彼に、特に御言葉の説教者として、その視点から Atonement 論のある側面を広げ、再構築させたのであらう」⁽³⁷⁾。

つまりフォーサイスは、明らかに *Christian Doctrine* で扱われた Atonement に関して言及しているのである。このことは、もう一つの問題を解決する。というのは、デールの著書 *Atonement* は、比較的早い時期の一八七五年に出版されていた。それは、フォーサイスが二十七歳の時であつた。もし、フォーサイスがデールの Atonement から影響を受けていたのならば、この時期からデールの神学に傾倒していたであらう。ところが、彼は若い時モーリスに傾倒したのである。もちろん、秀才であつた彼がデールの書物を読まなかつたはずがない。讀んだ上で、モーリスに傾倒したと考える方が妥当である。すると、後になってデールの神学に関心を示した彼が、何故もつと早くデールの Atonement から影響を受けなかつたのか不可解なのである。けれども、もしフォーサイスが *Christian Doctrine*

で扱われた Atonement について評価し、そこからデールの Atonement 神学全体を捉え直したのであるならば、この問題は克服されるのである。我々は、この路線でフォーサイスが受けたデールの Atonement の教理の影響を考察する。

後期デールの著作とフォーサイスの関係

フォーサイスにとって、初期デールの Atonement 神学は、あまり重要でなかったと考えられる。もちろん、聖書と教理史に裏付けられた考察は評価に値するが、力強い神学であったとは言えない。それは教科書的神学であった。デールは聖書に基づいて、キリストの死と罪の赦しの直接的関係を示し、新約聖書全体に一貫性を与えた。また、東方教会の受肉を中心とするギリシャ的思想に対して、西方教会のラテン的贖罪の教理を強調し、受肉からキリストの死に中心を置いた。けれども、それ自体はフォーサイスにとって決定的なことではなかった。そもそも十字架に重点を置く見方は、デールに限ったことではなかった。例えば、フォーサイスが慕っていた人物であり、モーリスの感化を受けていたボールドウィン・ブラウンにも見られた。⁽³⁸⁾ デールの教理史的考察は、フォーサイスにとって参考になったであろうが、路線を変更させるほどの思想でなかったと言える。むしろデールの Atonement は、受肉に対する関心が希薄になる傾向があった。⁽³⁹⁾ したがってこの時代は、十字架と受肉の関係を正しく捉えた Atonement 理解が求められていたと考えられるであろう。

さて初期と打って変わって、フォーサイスと後期デールの著作の関係は、この点で結びつくのである。というのは、フォーサイスがこの点についてデールを評価しているからである。彼は言う。

「彼（デール）がキリスト教を掴んだのは、受肉ではなく、Atonementと神の国によっていた。というのも彼にとって、Atonementの鍵は受肉でなかったが、受肉の鍵はAtonementであったのである」⁽⁴³⁾。

この評価は、まさに後期デールのAtonement理解に当てはまる。デールは、後期において、神の啓示からAtonementを捉え直したので、受肉に位置を与えることができたのである。つまり、「神の全ての行為は神の啓示を内に含んでいるはず」⁽⁴¹⁾なので、神の行為から受肉を切り離さずに済んだのである。もし、受肉を切り離して神について考えるならば、それは観念的神概念になるだろう。したがって、デールは、啓示の神学によって受肉に位置を与え、「哲学的思弁」⁽⁴²⁾に陥ることからも防いだのである。

けれどもデールにとって、神の啓示は救済が目的であった。したがって、「啓示は贖罪（redemption）によって現れる」⁽⁴³⁾と解した。そうすると、受肉においても死においても、贖いを開示する何かが必要となってくる。つまり、「神と神の人類に対する関係についての理解を広げ、深める」⁽⁴⁴⁾、神の行為としての啓示理解が求められるのである。そこで彼は、「Atonementも重要な啓示である」⁽⁴⁵⁾として、Atonementから受肉とキリストの死を捉え直したのである。このことこそ、フォーサイスがデールについて、「その（啓示の）視点からAtonement論のある側面を広げ、再構築させた」⁽⁴⁶⁾と言ったことなのである。したがって我々は、ここにフォーサイスにおけるデールの影響を探る形跡を見つけたのである。

神の聖性に与えた影響

さて、我々はフォーサイスと後期デールの著作との関係を確認したわけだが、ここから神の聖性に与えた影響を考察するに当たり、我々の命題を揺るがすような一つの問題にぶつかる。それは、先に触れたデールの「受肉の鍵は Atonement」という理解が、フォーサイスの影響によるものであるという事実を発見するのである。実は、フォーサイスはデールに先んじてこの理解を展開していたのである。フォーサイスは一八九三年 *Faith and Criticism* と題する論文集に "Revelation and the Person of Christ" という論文を寄稿した⁽⁴⁷⁾。この論文集は、一八八九年ゴア (Charles Gore, 一八五三—一九三二) を中心とするオックスフォードの神学者達が、歴史批評学と教会の伝統の総合を果たすべく、受肉に関する神学的考察をした *Lux Mundi* (世の光) に対抗して、非国教徒の立場から考察したものである。フォーサイスは、その論文の中で、既にデールに見られる理解を展開していたのである。彼は、啓示を「意志の出来事」⁽⁴⁸⁾、キリストの「人格的行為」⁽⁴⁹⁾と定義し、啓示と贖罪を結びつけた⁽⁵⁰⁾。そして神は、受肉や生誕においてではなく、キリストの人格的行為においてご自身を顕されたので、「Atonement は受肉の真実の鍵である」⁽⁵¹⁾と言いつたのである。

デールは、この論文を読んで「この P・T・フォーサイスとは何者か。彼は我々のために、我々が皆忘れていた言葉——恩寵という言葉——を回復してくれた」⁽⁵²⁾と述べたという。またフォーサイスは、デールを喜ばせたヘルマン (Johann Wilhelm Hermann, 一八四六—一九二二) のような書物に、彼が早く出会っていなかったことを残念に思うと述べているのだが、先のフォーサイスの論文は、まさにヘルマンに負って書かれたものなのである⁽⁵³⁾。そして、

デールがこの論文を読んだ直後に Atonement を説教しているこのことから、デールがフォーサイスの影響を受けていることが明らかなのである。

さて、そうするとフォーサイスは、デールに影響を与えたのであって、デールから Atonement の影響を受けていないことになるのだろうか。否、我々は、フォーサイス神学の成熟にとって、デールの存在が不可欠であったと考える。フォーサイス神学の成熟は、一八九六年の説教 *The Holy Father* ⁽⁹⁵⁾ に表された神の聖性概念に見ることができる。我々は、その僅か二年前に書かれたデールの著書がフォーサイスの聖性概念に何らかの影響を与えたと解するのである。

ところが、この見解においても克服しなければならない問題がある。それは、フォーサイスが「神の聖性」という用語を最初に用いたのが、一八九六年の説教ではないということである。最初に用いたのは、デールと出会う一年前の一八九一年になされた講演 *The Old Faith and the New* ⁽⁹⁶⁾ においてである。また、先の論文“Revelation and the Person of Christ”においても既に用いられている。けれどもこのことは、我々の考察を何ら妨げるものではない。というのもそれは、フォーサイス神学の成熟の兆しを示すものであるが、決定的なことではないからである。また、神の聖性という言葉自体は、フォーサイスの言葉ではなく、聖書にあるのである。むしろ決定的な点は、一八九六年の説教 *The Holy Father* で用いられた聖性概念である。したがって、価値ある考察は、成熟する前後の聖性概念の違いを考察することであり、その視点からデールの著書を考察することである。

このことは、それ程困難なことではない。まず“Revelation and the Person of Christ”における聖性の特徴を引用してみる。

「神の怒りとは……聖なる贖い主として、神の側で行う処置のことである。……それは神によつて起こされるべき償い (expiation) である。……神は(自身)の聖性に対する人間の応答を造られた。……神は、人間において、ご自身の聖性に対して罪の償いをされた。……罪の状態において、そのような神の聖なる愛の経験を我々に悟らせ伝えさせるのは——キリストの御業である」⁽⁵⁷⁾。

ここでの神の聖性とは、罪に対する神の態度であり、具体的にはキリストの御業に表された償いの行為である。しかしここには、*The Holy Father* で最も重要な概念である決定的なものが欠けている。それは、「審判による神の聖性」⁽⁵⁸⁾である。そして、この審判こそがデールの後期の著作に明確に表れているものである。少し長いがデールの言葉を引用する。

「キリスト教的 Atonement は……永遠なる義の法 (Eternal Law of Righteousness) に妨げられていない。……神は、人の命に落とされた罪という暗い恐ろしい影に入られた。……この暗い影は、神の判断 (estimate) の啓示であり、人間の罪に対する審判である」⁽⁵⁹⁾。

「罪の極刑における最も恐ろしい要素は、その容赦ない神的審判の開示に違いない。また神の無限の憐れみと愛において造られた『怒りと憤り (ロマ二・八)』の啓示に違いない。……ゲッセマネで主に降りかかり始め、十字架上で絶望的叫びに追い込んだ恐ろしい影は、主が人類の罪責 (guilt) に対する神の審判を悟った苦悶から来ていると思われる」⁽⁶⁰⁾。

デールは、裁きの行為として十字架を語った。そしてこの審判は、罪と罪の赦しだけでなく、「罪が破壊された」⁽⁶⁵⁾ことを明らかにした。この理解は、後のフォーサイス神学の深みを考察する上で、大きな助けとなる。そして何よりこの審判の理解は、フォーサイスに与えた最大の神学的影響であったと言っても過言では無いのである。神の審判は、フォーサイス神学に深みを与え、成熟させるのに決定的であったのである。

むすび

さて、我々は以上の考察から次のように結論したい。フォーサイス神学においてデールの影響は決定的なものであった。けれども、フォーサイス神学を成熟に到らせた神の聖性概念は、フォーサイスとデールの相互作用によって生み出されたものであったと言える。というのも、フォーサイスが最初に神の聖性を用いた講演⁽⁶⁶⁾ *The Old Faith and the New* (一九九一年) は、その三年前に出版されたデールの著書を振ったことから分かるように、デールの影響の下でなされたものであった。このことは、実際にフォーサイスがデールの「新しい福音主義」という言葉を用いながら、福音主義の源泉に立ち返ることを強く訴えていることから裏付けられる。そして翌年、両者は交わりを深め、フォーサイスは *"Revelation and the Person of Christ"* (一九九三年) を寄稿した。デールはそれに影響を受けて *Christian Doctrine* (一九九四年) を出版した。デールは、そこで聖性という言葉を一度しか用いていないが、自身の Atonement 理解を広げることができたのである。

けれども、まだ克服されなければならない問題があった。というのもデールは、マクラウド・キャンベルやモバリーがしたような、キリストによる罪の告白を採用したのである。⁽⁶⁷⁾ 彼にとって、罪の現実性を齎すには、それが限

界だったのである。そこには、罪を犯したことのないキリストがなぜ罪を告白しうるのかという問題が残されていた。けれども、デールにはもう時間が残されていなかった。彼は、その課題と共に、フォーサイスに襁を渡したのである。その課題は、審判の調べを伴う成熟したフォーサイス神学によって克服された。こうして神の審判における聖性概念が生まれたのである。

以上のようにして考察した時、フォーサイスの娘が両者の交わりを「私の父にとって真に深い喜びであった」⁽⁶⁶⁾と述べたことが真実に理解できるのである。

註

(1) Atonement は、従来「贖罪」と訳されていた言葉である。けれども、この言葉は、本来「関係回復」と言う意味を持つており、その後「罪の償い」という意味で用いられてきた。したがって、時代や神学者によってその意味が異なるので、本論文では Atonement とそのまま表記することにした。なお、「関係回復」という訳語を最初に用いたのは大木英夫である。

(2) Forsyth, *The Justification of God* (Oregon: Wipf & Stock, 1999) 194; Cf. 209.

(3) フォーサイスにおけるモリスとデールの影響については、拙論「P・T・フォーサイスにおける F・D・モリスの影響」(聖学院大学総合研究所紀要 No.35, 2006)と「P・T・フォーサイスにおける R・W・デールの影響」(聖学院大学総合研究所紀要 No.36, 2006)を参照せよ。

(4) Cf. P. T. Forsyth, "Dr. Dale," *Review of The Life of R. W. Dale*, by A. W. W. Dale, *London Quarterly Review* 91 (Apr 1899): 221 (以下 "Dr. Dale," *Review* を略す)。

(5) 我々は、フォーサイス神学の成熟を一八九六年に説教された *The Holy Father* に見る。ここで彼は、審判を伴う神の

聖性を打ち出したのである。 Cf. Forsyth, *God the Holy Father* (London: Independent Press, 1957) (以下 *Holy Father* と略す)。

- (9) Forsyth, *The work of Christ* (London: Collins, 1965) 129 (三〇一頁) (以下 *work* と略す)。
- (7) フォーサイスとテールの関係について参考になるものとして、W. L. Bradley, *P. T. Forsyth: The Man and His Work*, Independent Press (London: Independent Press, 1952) 100-102 (以下 P. T. Forsyth と略す)。Walter Bosse, *Theologie und Kirche bei Peter Taylor Forsyth* (Munster, 1967) 90-95, Samuel Mikolaski, "The Nature and Place of Human Response to the Work of Christ in the Objective Theories of the Atonement Advances in Recent British Theology by R. W. Dale, James Denney and P. T. Forsyth" (Oxford University, 1958), 大宮博「P・T・フォーサイスの贖罪論(上)」『神学』(一六号、東京神学大学神学会編、教文館、一九五九年)二六—六七頁。大宮博「P・T・フォーサイスの贖罪論(下)」『神学』(一八号、東京神学大学神学会編、教文館、一九六〇年)一一九—一四四頁。また先に挙げた拙論「P・T・フォーサイスにおけるR・W・テールの影響——教会と社会の関係をめぐって」も参照せよ。
- (8) Cf. A. W. W. Dale, *Life of R. W. Dale* 325。
- (9) テール『贖罪論 全』エ・ビ・ハッチンソン訳、日本聖公会出版社、一八九九年参照。
- (10) R. W. Dale, *The Atonement* (Oswestry: Quinta Press, 2003) (以下 *Atonement* と略す)。
- (11) Cf. A. W. W. Dale, *Life of R. W. Dale* 221. Cf. Jessie Forsyth Andrews, "Memoir," In work 17-18 (以下 "Memoir" と略す)。
- (12) Cf. Dale, *Christian Doctrine* (London: Hodder & Stoughton, 1894) (以下 *Christian Doctrine* と略す) 198。
- (13) Cf. Forsyth, work 71 (114—115頁)。
- (14) Cf. Dale, *Christian Doctrine* 236-254。
- (15) Cf. Forsyth, work 71 (241頁)。しかし、基本的にフォーサイスは、Atonementを「罪を破壊する行為」、つまり償罪として用いている。

- (16) Cf. Lorna, "Dr. P. T. Forsyth of Cambridge," *British Weekly* (7 March 1901): 530-531. Lorna は、ヘアー・サ・イクが著した『宗教小者叢書』を編集した W. R. Nicoll の編集補佐であった Miss Jane Stoddart の人である。
- (17) R. C. Moberly, *Atonement and Personality* (London: John Murray, 1913) (ズト *Atonement and Personality* ヲ著す)。
- (18) Cf. Dale, *Atonement* 276-277.
- (19) Dale, *Atonement* 238.
- (20) Cf. Moberly, *Atonement and Personality* 4-6, 392-393. Cf. Robert S. Franks, *Doctrine of the Work of Christ* 688-689. Cf. Mozley, *Doctrine of the Atonement* 179. Cf. Dale, *Atonement* 289-294.
- (21) Dale, *Atonement* xlv.
- (22) Dale, *Atonement* 322, 323.
- (23) モズリーは、そのような見解を「本質を強調しすぎとする」として、トールを擁護しようとするが、それによりロイヤル・イクの傾向にあることは否めなるとしてゐる。 Cf. Moberly, *Atonement and Personality* 395. Cf. Mozley, *Doctrine of the Atonement* 179.
- (24) Dale, *Atonement* 235.
- (25) Cf. Bradley, *P. T. Forsyth* 31-33. Cf. McCurdy, *Attribute* 23-26.
- (26) Cf. Forsyth, *work* 127-128 (「イ・ダラー」〇〇頁)。
- (27) Bradley, *P. T. Forsyth* 101.
- (28) Cf. Bradley, *P. T. Forsyth* 101.
- (29) Bradley, *P. T. Forsyth* 101.
- (30) Dale, *The Jewish Temple and the Christian Church* (London: Hodder & Stoughton, 1865).
- (31) Dale, *Christian Doctrine*.

- (32) Cf. Dale, *Christian Doctrine* vii.
- (33) Dale, *Christian Doctrine* v.
- (34) Dale, *Christian Doctrine* vii.
- (35) Dale, *Christian Doctrine* vii.
- (36) Cf. Dale, *Christian Doctrine* viii.
- (37) Forsyth, "Dr. Dale," Review 203.
- (38) Cf. Forsyth, "Baldwin Brown" 141. 拙論「P・T・フォーサイスにおけるF・D・モーリスの影響」を見よ。
- (39) 初期テールの著作に空肉という言葉は殆ど出ていない。彼はキリストが肉となられたことを受容として捉えている。
Cf. Dale, *Atonement* 119, 324.
- (40) Cf. Forsyth, "Dr. Dale," Review 202.
- (41) Dale, *Christian Doctrine* 257.
- (42) Dale, *Christian Doctrine* 256, Cf. 219.
- (43) Dale, *Christian Doctrine* 221.
- (44) Dale, *Christian Doctrine* 257.
- (45) Dale, *Christian Doctrine* 257.
- (46) Forsyth, "Dr. Dale," Review 203.
- (47) Forsyth, "Revelation and the Person of Christ" In *Faith and Criticism: Essays by Congregationalists* (London: Sampson Low Marston, 1893): 95-144 (以下「Revelation」を略す)。
- (48) Forsyth, "Revelation" 98.
- (49) Forsyth, "Revelation" 99.

- (㉟) Cf. Forsyth, "Revelation" 99, 105, 107, 117 125, 130-131, 136-140.
- (㊀) Forsyth, "Revelation" 139.
- (㊁) Andrews, "Memoir," 17. Cf. A. W. W. Dale, *Life of R. W. Dale* 659.
- (㊂) Forsyth, "Dr. Dale," Review 202.
- (㊃) Cf. Forsyth, "Revelation" 97.
- (㊄) Forsyth, *Holy Father*.
- (㊅) Forsyth, *The Old Faith and the New* (Leicester, Birmingham, and Leamington: Midland Educational Company; Manchester: Brook & Chrystal, n.d. [1891]).
- (㊆) Forsyth, "Revelation" 141-142.
- (㊇) Forsyth, *Holy Father* 10, Cf. 21
- (㊈) Dale, *Christian Doctrine* 265.
- (㊉) Dale, *Christian Doctrine* 268.
- (㊊) Dale, *Christian Doctrine* 271, Cf. 234.
- (㊋) Cf. Dale, *The Old Evangelicalism and the New* (London: Hodder & Stoughton, 1889).
- (㊌) Cf. Bradley, *P. T. Forsyth* 44.
- (㊍) Dale, *Christian Doctrine* 267.
- (㊎) Cf. Dale, *Christian Doctrine* 267. Cf. Forsyth, *The Work* 129 (||○○—||○ | ㊐). Cf. J. MacLeod Campbell, *The Nature of the Atonement* (Michigan: Eerdmans, 1996). Cf. Moberly, *Atonement and Personality* (London: John Murray, 1913).
- (㊏) Andrews, "Memoir" 17, 18